



2008年 新年のごあいさつ

廃棄物学会会長 武田信生

新年明けましておめでとうございます。

学会の大きなイベントのひとつである年次研究発表会は、昨年 11 月、つくば市で開催され、盛会裡に終了してホッとしております。学会を取り巻く様々な困難の中で 1000 名余の参加者を得、各会場で熱心な討議が繰り広げられましたことは、この会が大成功であったことを示していると考えております。企画、実行ならびに支援に当たっていただきました方々に、あらためて謝意を表したいと存じます。

さて、この研究発表会では、特別講演として地球温暖化の問題がとりあげられ、また、中央環境審議会循環型社会計画部会を併催していただきました。このことは、今、学会が置かれている立場、あるいは周辺状況をまさに象徴するものであったと思います。

私は、2007 年のノーベル平和賞が気候変動に関する政府間パネル(IPCC)ならびに米国前副大統領アル・ゴア氏に授与されることはヨーロッパからの強烈なメッセージであったと感じております。そして、ブッシュ大統領に率いられる、尻の重いアメリカ合衆国、経済至上主義に一定の不安要因が生まれ「和谐社会」を掲げ出した中国を脱温暖化に引き込む大きな流れを作ったといえると思います。今後、数十年間にわたって、「環境」は「地球温暖化問題」が軸となり、世界の産業、貿易、外交など様々な面に、影響を及ぼし続けることになるのではないかと考えます。

「脱温暖化」を真摯な態度で考えれば、いままでの開発と成長を主人公においた社会のあり方を根本的に変えて、持続的な社会、持続的な生命、持続的な地球を取り戻していくことが大切であることに気付くでしょう。このことに多くの人々は同意し、多くの組織体はそのことを標榜しているのですが、果たして現実はそのように動いているのでしょうか。

ところで、2004 年に環境分野ではじめてといわれるノーベル平和賞を受賞したワンガリ・マータイ女史は「MOTTAINAI」という言葉に感銘し、世界共通の言葉として広めようとしているといわれています。

そこで、「もったいない（勿体ない）」の意味を広辞苑（第四版）で引いてみますと、「①神仏・貴人などに対して不都合である。不届きである。②過分のことで畏れ多い。かたじけない。ありがたい。③そのものの値打ちが生かされず無駄になることが惜しい。」の順でできます。

わが国において改めて「もったいない」という言葉がもてはやされていますけれども、その趣旨が③にとどまっているのではないかと懸念しています。むしろ、私は①や②の意味、すなわち、自然に対する畏敬のようなものに繋がらない限り、本来的ではないと考えております。なぜなら、「値打ち」なるものは相対的なものであり、わが国では「ごみ」であっても中国では「資源」となることが如実に示すように、世界共通あるいは人類共通のテーマとはならないからであります。

わが国は、物質的なものと同時に理念的なるものを重視してきた、あるいはむしろ理念的なるものを優先してきた歴史をもっていたと思うのですが、近年では理念的なるものは軽視され、即物的・即時的なものが重視されるように傾斜してきたように思います。ワイドショーが形成する世論が力を得、場当たりの政策しか導き出すことができないような事態が続けば、21 世紀のわが国には、衰退しか約束されないことになるのではないかと危惧するものであります。

物や情報の流れの中で最下流に位置しているところに関心を寄せてきた人たちの集まりであるこの学会こそが、社会のあり方の問題点をいち早く察知して警鐘を鳴らす立場にありますし、また、そうしなければならぬと考えています。

第 18 回研究発表会 つくば市にて盛大に開催される

第 18 回研究発表会は、平成 19 年 11 月 19 日(月)～21 日(水)の 3 日間、つくば市のつくば国際会議場において開催された。つくばでの開催は 2003 年以来 4 年ぶり 2 回目であるが、つくばエクスプレスの開通によって都心からのアクセスが向上するとともに、開発著しく非常に洗練された活気ある地での開催となった。

参加者数は、ここ数年減少の傾向を示しているが、今回も昨年の北九州大会の 1,124 人を下回り、表-1 に示すように 1,013 人となった。また、発表件数も 362 件（口頭発表 203 件、ポスター発表 159 件）であり、昨年よりも約 1 割の減少となった。一方で、会場であるつくば国際会議場は設備が非常に整っており、7 つの口頭発表会場と十分なスペースのポスター会場を分散させずに 1 箇所確保ができた。

参加者からも好評であり、各会場で熱気に満ちた発表が行われた。なお、表-2 に優秀ポスター賞一覧を示す。

さて、今年の研究発表会の運営において特筆すべきことが3点ある。1点目は、初日の発表開始を午後からとし、最終日をフルセッションとしたことである。そのことによる混乱もなく、順調な運営ができたとともに最終日のセッションが、夕方まで活気に満ちていたのが印象的であった。2点目はポスター発表の重視であり、昨年より口頭発表会場を1つ減らしてポスター数を増やした。ポスター発表特有の率直かつ活発な意見交換は、お互いに得るものが大きいと考える。3点目は科学技術振興機構（JST）の投稿公開機能を活用したWeb上での発表論文の全文公開である。会員・非会員を問わず国内外から発表論文を検索・閲覧できる環境を作ることは、今後の情報化・国際化の流れの中で非常に大きな転換点になったと考える。

研究発表会の開催にあたっては、(独)国立環境研究所
および(独)産業技術総合研究所を中心として実行委員
会が組織され、準備・運営を担当いただいた。実行委
員会を始め、御尽力いただきました皆様には心より謝
意を申し上げたい。

(学術研究委員会 山口直久 記)

表-1 第18回研究発表会参加者受付数

正会員	学生会員・登録 団体市民会員	非会員	合計
732	125	156	1,013

表-2 優秀ポスター賞一覧 (セッション順)

講演番号	論文名・受賞者
A4-9	杉並区におけるレジ袋有料化実証実験に関する取組 (株) エックス都市研究所 ○島根由華, 山田芳幸, (株) 電通総研 上田康裕、杉並区 井山利秋, 山 根洋一
※A6-4	生ごみバイオガス化・有料化導入効果の評価のための システム分析 北海道大学 ○佐藤剛, 古市徹, 谷川昇, 石井一英
※A6-5	川崎市をモデルとした産業連携による一般廃棄物循環 システム研究 廃棄物学会 石渡和夫、川崎市 山本隆之、東洋大 学 WONG Looi-Fang、(株) エックス都市研究所 ○山口直久、東洋大学 土田えりか, 柳奈保子, 藤 田壮
A6-6	素材産業を活用した動脈・静脈連携システムの設計と 評価に関する研究 (財) 日本環境衛生センター ○金子昌示, 立尾浩 一、(独) 国立環境研究所 大迫政浩
A6-8	ANP 手法を用いた廃棄物管理の広域化システム評価 北海道大学 ○佐藤直生, 古市徹, 谷川昇, 石井一 英
A8-1	戸別収集地点における家庭系ごみ搬出行動特性とごみ 袋密度の分布 福岡大学 ○鈴木慎也, 山下雅史, 松藤康司
※C1-8	廃プラスチックの灰溶融炉化学原料化プロセスのライフ サイクルインベントリ評価 京都大学 ○高岡昌輝, 京都大学(現 シャープ(株)) 萩原崇博、京都大学 大下和徹、京都大学(現 立命 館大学) 武田信生、京都大学 松本忠生
C4-10	水砕した不法投棄物溶融スラグのコンクリート製品及 びアスファルト混合物への利用 (地独) 岩手県工業技術センター○菅原龍江, 八重 樫貴宗, 平野高広, 白藤裕久、岩手県環境保健研究 センター、佐々木秀幸 岩手大学 藤原忠司, 小山 田哲也
D4-5	長期の比抵抗モニタリングによる廃棄物層の性状変化 把握 早稲田大学 ○河村陽介, 杉崎真幸, 香村一夫 千葉県環境研究センター 依田彦太郎, 栗原正憲
D8-9	河川の硝酸性窒素汚染源同定のための大腸菌群遺伝子 分析手法の検討 北海道大学 ○石井一英, 古市徹, 谷川昇, 上村友 美
※F1-2	Assessment of CDM scenarios on waste management in developing country: case study of Hanoi, Vietnam ○Suk-Hui Lee, Ki-In Choi, Masahiro Osako, Masato Yamada, National Institute for Environmental Studies, Tomonori Ishigaki, Ryukoku University, Jong-In Dong, University of Seoul
※F3-6	PCDDs/DFs and Co-PCBs concentrations in some kinds of industrial wastes in Korea ○Jae - Yun Kim ,Sang-Yee Ham, Dong-Hoon Lee, University of Seoul、Myung-Hee Kwon, National Institute of Environmental Research
※F4-10	Characteristics of dissolved organic matter and trace organic pollutants depending on leachate treatment processes in final disposal site containing incineration residues ○Woo-Chan Koh, Min-Woo Yang, Sang-Yee Ham, Dong-Hoon Lee, University of Seoul、Yong-Jin Kim, Hun-Young Lee, Mokpo National Maritime University

※講演番号の前に「※」のあるものは最優秀ポスター賞

☐ ☒ ☐ ☒

日韓廃棄物学会国際シンポジウム関連の報告

第18回廃棄物学会研究発表会における国際シンポジウムが、第1日目の平成19年11月19日15時から17時に行われた。テーマは「有害廃棄物のマテリアルフローとリスク管理」で、コーディネータを国際委員会の杉山涼子氏が担当した。発表者は日本側が京都大学の酒井伸一氏、国立環境研究所の寺園淳氏、韓国側が韓国環境省のKang, Sung Goo氏、スーウオン大学のJung, Bong Jin氏であった。

酒井伸一氏が「残留性化学物質と廃棄物管理」のテーマで残留性化学物質管理に対する国際的動向、ライフサイクル及び廃棄物管理のプロセスの重要性、ライフサイクルにおける化学物質制御について報告した。Kang, Sung Goo 氏は「韓国危害性廃棄物及び POPs 管理の現況と展望」のテーマで有害廃棄物の分類、アスベスト管理、POPs 管理、マニフェストシステムについて報告した。また、寺園淳氏が「アジアにおける廃電子機器のマテリアルフローと管理」のテーマで日本国内における E-waste の国内マテリアルフロー、日本・中国・香港間の中古 TV の貿易フロー等報告した。Jung, Bong Jin 氏は「電気電子製品の国際環境規制動向」のテーマで電気電子製品を巡る国際的な環境規制の流れ、各国での法規制整備状況（EU、中国、日本、米国カリフォルニア）、韓国における法規制について報告をした。約 100 名の聴講者があり活発な質疑応答がなされた。

国際ポスターセッションが、17時から18時30分から国際シンポジウムの終了後、多目的ホールで行われた。ポスターセッションの中で、英語のポスターと日本語のポスターとを混在させるかたちで、分野ごとに展示する方式は今年で3年目になるが、違和感がなく受けいれられようになった。

そのうち韓国からの発表が 26 件、日本からの発表が 17 件であり、発表内容は、廃棄物・3R 全般が 5 件、品物別リサイクルが 11 件、熱処理が 13 件、最終処分・不法投棄が 11 件、有害廃棄物処理が 2 件であった。優秀賞の投票が行われ、表-2 の 3 件が選ばれた。

韓国からの参加者は、2日目午前中に、つくば市の
ごみ管路輸送設備と国立環境研究所循環型社会・廃棄
物研究センターを見学した。午後には「下水汚泥の循
環的利用に関するセミナー」が開かれ、(独)土木研究
所尾崎正明氏の「下水処理施設におけるバイオマスの
効率的利用」、バイオ燃料(株)村木謙吾氏の「下水汚
泥燃料化事業について」、日立造船(株)北野徳之氏の
「下水汚泥バイオソリッド燃料化」の講演があった。
3日目は、東京スーパーエコタウン内のバイオエナ
ジー(株)の「食品残渣メタン発酵発電施設」とアル
ファ(株)「食品残渣の油温減圧脱水による飼料化施
設」を見学した。盛りたくさんの内容で韓国からの参
加者にとっては、有意義であったと思われる。

(国際委員会 鈴木明郎 記)

平成 19 年 11 月 20 日

学会名称等のアンケート調査結果概要報告

法人化・将来構想検討会では、現在検討を進めている学会の将来構想や名称等について広く会員の意見を伺うため特別シンポジウム[「廃棄物学」と学会の将来に向けて]に合わせアンケートを実施した。

1. アンケート数

対象数（特別シンポジウム参加者） 550 人

回答数 255 人(内学会名称回答者 108 人)

2. 調査結果

◆将来構想についての「学会の使命」及び「3つの特徴」については95%以上の圧倒的多数が賛同できるという回答であった。

ただし、国際化については対象をアジアに限定せずに世界規模とすべきとの意見が多かった。

◆情報発信対象は、市民、国際、関連分野等が多く、利用メディア媒体としては半数以上がインターネット、次いで紙媒体、電子媒体(CD、DVD等)であった。

◆学会の今後目指す方向性については、

・廃棄物を軸として「循環型社会を目指す」の回答が43%であった。

- ・循環型社会を指向するが、廃棄物の適正処理・処

分を基盤とし幅広く活動する回答が 35%あった。

この方向性にふさわしい学会名称としては、現状の「廃棄物学会」維持が 23%あり、残り 77%は何らかの名称変更の提案があった。

その中で「廃棄物」基調の名称が 48%、「循環」基調の名称が 47%あり、具体的には「廃棄物・資源循環学会」「廃棄物・循環社会学会」「資源循環学会」「循環(型)社会学会」などの提案があった。

◆今後の本学会のあり方について、60人の方から貴重な意見をいただいた。主な意見としては、①市民参加学会と言う特徴を発展させるような取り組みを期待する。②国際的(特にアジア)な資源循環の確立や東アジアとのパートナーシップを目指すべきである。③経済活動のミスマッチがないよう経団連などの団体と連携してほしい。④技術や数式が非常に多く、現場で即役立つものはあまり見受けられなかったなど、現場指向の実学重視、市民や他学会との連携、社会貢献など多数の真摯な回答があった。今後、これらの意見を参考に学会の将来構想・運営に活かしたいと考えている。

(法人化・将来構想検討会長 澤地實 記)

平成 20 年 3 月 14 日

平成19年度廃棄物学会中国四国支部セミナーの報告

平成 19 年 11 月 27 日 (火) に高知市において中国四国支部セミナー「循環型社会を考える」が開催された。本セミナーでは、循環型社会構築に向けての最新情報を提供するとともに、高知大学環食同源プロジェクトから地域社会への発信を行うことを目的として、4 人の講師から講演があった。

まず、国立環境研究所の山田正人氏から「産業廃棄物の物流を捉える～関東域におけるケーススタディー」と題して、産業廃棄物の物流を把握することの重要性や廃棄物ストリームデータベースの構築などについて講演があった。続いて、鳥取大学工学部の赤尾聡史氏から「高温 L-乳酸発酵による有機性廃棄物の資源化への取り組み」と題した講演があり、生分解性プラスチックであるポリ乳酸の原料となる生ごみからの非滅菌下での L-乳酸の生成について研究内容の紹介があった。次に、高知大学農学部益本俊郎氏から「環食同源プロジェクトによる循環型社会への貢献」と題して、新しい環境保全型食料生産システムを目指すユニークな取り組みについての研究事例が紹介された。



最後に、環食同源プロジェクトメンバーの高知大学農学部の受田浩之氏から「濃縮海洋深層水を利用した微細藻・デュナリエラの大量培養システムの構築～新しい二酸化炭素の循環モデルの構築」と題した講演があり、海洋深層水の製造後の高濃度の塩水廃液からβ-カロテンを大量培養しようとする試みについて分かりやすいお話しがあった。各講演の後には活発な意見交換も行われ、参加者にとっては大変有意義なセミナーになった。

(中国四国支部 樋口隆哉 記)

平成19年度北海道支部説見学会・セミナー報告

北海道支部は、平成 19 年 11 月 9 日(金)に、環境産業集積都市の室蘭市において、施設見学会とセミナーを開催した。

午前に施設見学会が行われ、日本環境安全事業(株)(JESCO)北海道事業所を訪れた。JESCO 北海道事業所は、PCB 廃棄物処理特別措置法に基づき、北海道・東北等に保管されている PCB 廃棄物を処理する施設であり、平成 20 年 4 月からの本格稼働に備えた準備作業を行っていた。PCB 処理情報センターにおいて、事業所の概要、処理プロセス、環境安全対策等の説明を受けた後に、PCB 廃棄物処理施設へ移動して施設内を見学した。搬入されたコンデンサ、トランスからの PCB 抜油、解体、洗浄等のプロセスでは手間のかかる遠隔操作工程が多いこと、事故防止・環境安全のための多重安全対策がとられていること等が印象的であった。

室蘭名所の白鳥大橋と工場群・港を一望するレストランで昼食をとった後、セミナー「胆振地域の廃棄物の適正処理と有効利用の動向」を室蘭市市民会館にて開催した。まず、JESCO 北海道事業所渡辺正基氏から「高濃度 PCB 適正処理の動向」と題する講演があり、PCB 処理施設の概要と今後の事業展開等が紹介された。次に、新日本石油研究(株)中野祐一氏から「北海道

リサイクルブランドレコサールの用途紹介」と題する講演があり、原油精製時の副産物である硫黄を利用して開発した耐食性に優れた土木資材の紹介があった。さらに、白老町荻原康政氏から「白老町におけるバイオマス燃料化」と題する講演があり、一般廃棄物中のバイオマスを製紙工場のボイラ燃料等にする画期的な構想が紹介された。非会員の方々も含めたセミナー参加者は 100 名を超え、質疑応答も活発になされた充実したセミナーであった。

(北海道支部幹事 中村恵子 記)



【お知らせ】

第10期役員選挙についてのお知らせ

廃棄物学会第10期役員（理事・監事）の選任につき、廃棄物学会会則及び廃棄物学会役員の選任に関する規程にもとづき、次の日程で選挙を行います。

◎告示：平成20年1月31日（木）

（廃棄物学会誌第19巻第1号並びに廃棄物学会事務局に告示します。）

◎立候補の届出：

平成20年1月31日（木）～2月22日（金）（必着）

◎投票用紙の発送：平成20年3月3日（月）

◎投票締め切り：平成20年3月25日（火）（必着）

◎開票：平成20年3月26日（水）

◎選挙結果の承認（新役員の決定）：平成20年度総会

※第10期役員選挙については、学会ホームページに関連記事が掲載されておりますのでご覧下さい。

※立候補の届出及び候補者の推薦にあたっては、「廃棄物学会第10期役員選挙立候補届・推薦届」を使用して下さい。

※立候補者及び推薦人は、選挙権及び被選挙権を有する正会員（平成19年9月30日までに平成19年度会費を納入した正会員）に限ります。

韓国廃棄物学会発表論文の募集

2008年度韓国廃棄物学会研究発表会が、2008年5月8日～9日に韓国全羅南道順川市で開催される予定で、例年どおり国際セッションが設けられます。日韓廃棄物学会の交流事業の一環として行われるこの国際セッションには、日本からも多くの会員が毎年参加し、論文を発表しています。皆様の参加を期待いたします。

発表論文 英文でA4版用紙3枚以内

発表方法 ポスター

提出締切 2008年3月20日（火）

提出・問合せ先 廃棄物学会事務局（下記参照）

会 員 状 況		H19.11.30 現在
		()内は、H19.4.1以降の増減
正 会 員		3,115 (-85)
学生会員		337 (+39)
外国人会員 (DM)		26 (+2)
登録団体市民会員		6 (+2)
公益会員		105 (-1)
賛助会員		151 (0)
計		3,740 (-43)

注) 外国人会員(DM)は、廃棄物学会外国人等会員規程第4条に定める会員を示す。

廃棄物学会ニュース No.102 平成20年1月1日発行

廃棄物学会 〒108-0014 東京都港区芝5-1-9 豊前屋ビル5F

Tel.03-3769-5099 Fax.03-3769-1492

http://www.jswme.gr.jp

R100

印刷媒体は古紙配合率100%再生紙を使用しています

JSWME Newsletter No.63(January)

英文ニューズレター第63号が発行されます。

(主要目次)

会長新年挨拶：武田信生学会長

法制度改正の動向等：食品リサイクル法の改正

国際セッション報告：国際シンポジウム「有害廃棄物のマテリアルフローとリスク管理」
英語ポスターセッション

学会活動紹介：第3回アジア太平洋廃棄物専門家会議 (SWAPI)の開催

※JSWME Newsletterは電子配信のみとなっています。最新号、バックナンバーは学会HPから入手できます。

Contents of JSWME NL No.63

1 New Year Greetings: JSWME President, Prof. Nobuo Takeda

2 Movement of Recycling Laws: Amendment of Food Wastes Recycling Law

3 Report on Internal Session in the JSWME's 18th Annual Conference:

- Japan-Korea Symposium:

“Hazardous Waste Material Flow and Risk Management”

- International poster session

4 Report on “The 3rd Expert Meeting on SWM in Asia & Pacific Islands*”

5 Cartoons by High Moon: “Fast waste & Slow waste”

*The Expert Meeting was named as the Society of Solid Waste Management Experts in Asia & Pacific Islands (SWAPI) in the previous meeting.

☆☆事務局だより☆☆

みなさま、明けましておめでとうございます。前回、事務局だよりを書いてからあつという間に一年が経ちました。本年も学会ニュースのご愛顧のほどをよろしくお願いいたします。

さて、私といえば、前回同様、タイの処分場の調査から帰ってきたところです。逃げ場所のない処分場の上で、真上から降ってくる熱帯の太陽に体をじりじりと焼かれ続け、帰りの飛行機では、キャビンアテンダントに英語で話しかけられるほどに黒くなってしまいました。

そのようなアツい調査をしていると、仕事の後の一杯のビールが当面の生きる糧となります。幸いタイには、ビア・シンという誠にパンチの効いたビールがあり、「ビア・シン、ビア・シン」と心の中で呟きながら灼熱の処分場の上をうろつきまわるわけです。

しかし、今回のタイでは総選挙直前ということで、こともあろうか禁酒令が敷かれていました。食堂でも、店でもビールを一切売ってくれない、怪しく暗いバーの中でも、みなけだるそうにコーラをすすめるのみ、頼みの綱はホテルの自室のミニバーだけという悲しい日々を送りました。皆さま、タイでは生水だけでなく、選挙にも気をつけましょう。

(山田正人 記)

＝ 事務局年末年始休暇 ＝

平成19年12月29日(土)～平成20年1月6日(日)

次号（学会ニュース No.103）は3月5日発行予定です。

※学会ニュースはホームページに掲載しています。印刷版の郵送が不要になった場合には、事務局までご連絡ください。